PROJECT

チベットの護符に息づくもの

文
長野泰彦

共同研究 ● チベット仏教古派及びポン教の護符に関する記述研究（2015-2018）

チベットの宗教文化はアジアにおける精神文化を支える柱のひとつとして長く注目を集め、分厚い研究の蓄積がある。しかし、それは主として仏教に関する正統的な教義あるいは哲学及びそこから派生する図像表象にかかる研究であり、人々の宗教実践に関するアプローチは少ない。本研究では、チベットに広く行われている護符に注目し、一般の人々の目線に立って、それらの内容・意味・用途の記述、文献学的裏付け、護符の加持・聖化（パワーの付与）に関する儀礼、その経済的仕組み、チベット人でない人々を含む民衆の間での現代的意味などを宗教学、文化人類学、仏教学、インド学、図像学、言語学の方法論、及び、フィールドワークと文献学の手法を組み合わせつつ調査研究し、究極の目標としては、護符というモノを通じてチベットの宗教実践の有り様と宗教文化基層の一端を明らかにすることを目的としている。この目標を実現するための第一歩として、国立民族学博物館が所蔵する下記の護符コレクションに関する記述研究を行って的確な情報を集積し、同時に同資料が研究者の共同利用に資するよう研究成果の公開準備を行う。

1979年に国立民族学博物館は「チベット仏画コレクション」（標本番号 H79124 ～ 80508）を購入した。その内容は実は仏画ではなく、千点を超すチベット仏教古派及びポン教の護符とそれを刷るための版木である。

ポン教とは7世紀チベットに中央集権国家が樹立され、仏教が支配的となる前からチベットに広く行われていた宗教で、もとは葬送儀礼を中心とする習俗の総称であったが、中央チベットから駆逐された後に仏教の教理体系に刺激を受けて、土着的要素をも取り入れた独自の体系を作り上げ、少数ながら現在でも宗教集団として生き続けている。チベット仏教（特にその古派、つまりニンマ派）とポン教は、インドとも中国とも異なる独自の哲学・論理体系を作り上げ、東洋人の思惟方法を語る上で主要な柱のひとつになっている一方で、民間信仰をも貪欲に受け入れ、独特の「行」を発展させてきた。チベットの精神文化基層においては、超越的な原理と世俗的な経済原理とが絡み合っており、そのふたつを有機的に結びつけるための仕掛けとして呪力観ないし呪物が働いていると思われる。仏教やポン教の大蔵経論部の一定のポーションが「呪法」や「脱呪法」に割かれているのはそのことと密接な関連がある。護符はそこに機能する身近な呪物のひとつである。

具体的にどのようなものかを仏教古派の護符（標本番号 H79135）について見てみよう。紙に刷られており、一般に護

仏教古派の疫病除けの護符（国立民族学博物館所蔵　標本番号 H79135）

符の大きさは様々だが、この標本は A4 サイズ。家の戸口や心柱・梁に貼り付ける場合もあるが、折りたたんで身につけることが多く、正方形に折りたたんだものの四辺に糸をかける（写真 A）。古いタイプでは糸目を封蠟で固定する。一般にスンコル又はスンデューと呼ばれる。ガウ（写真 B）という持仏入れに入れて持ち歩く場合もある。折りたたみ方や糸の種類・色・かけ方は儀典書に定められており、ガクパ（寺院の傘下にある霊能者）によって刷られ且つ作られて、最後に行を体得した僧侶がそれに「気」を込める。

写真 A　マントラが書かれたスンコル。神格等が描かれる場合もある（長野泰彦撮影）。

写真 B　「ガウ」持仏入れ（国立民族学博物館所蔵　標本番号 H1873083）

イノシシの絵をご覧いただきたい。これは疫病除けのお守りで、中心の丸い部分に願が書かれている。この部分はチベット語であるが、神の言葉とされているため、通常はあるはずの音節の区切りを示す記号が書かれない。例えば、私の名前　ナガノ　は ནྣ་ངན་རྣོ rna nga rno のように書かれ、ツェクという記号が音節の切れ目を明示するのが正書法である。ところが、この丸の中は

tsakraddi'chang
balagnyannad
bdunduggaglog
sabgerrimsnid
thadraksharaksha

のように書かれ、どこに切れ目があるのか判然としない。チベット語の語彙に関する知識を総動員して意味のある文に再構成してみると、

tsa krad di 'chang ba la
gnyan nad bdun dug gag log sab ger
rims nid thad raksha raksha

「このチャクラを保持する者のために、恐ろしい病と 7 つの毒が膨らむのを無効化する。疫病よ、退散せよ」となる。

中心の円のふたつ外側まではチベット語のように思われ、khog pa dmar po song「腹の赤（虫）よ、去れ」、'go ba'i rams（正しくは rims）nad「伝染病」等が読み取れるが、文は読めない。おそらく何らかのマントラが書かれていると思われるが、典拠は不明である。そこからさらに外側の同心円にはサンスクリット語またはヴェーダ語のマントラが書かれているらしいが、意味と出典は不明で、共同研究で解明の糸口を探りたい。

中心の丸い部分に書かれているのは普通チベット語であるが、近年の調査からポン教の護符にはシャンシュン語が書かれているものがあることが分かってきた。本コレクションには存在しないが、今後の現地調査などで収集できれば、同言語の文の解読に有力な手がかりとなる。

シャンシュン語は、吐蕃王国の成立あるいは仏教がもたらされる以前にチベットに優勢であったポン教の本拠地──西チベットのシャンシュン国（漢籍では女國）──に話されていたチベット・ビルマ系の未解読言語で、10 世紀頃にはチベット語に押されて死語となった。敦煌出土チベット文字文献からシャンシュン語と思われる文書が計 5 点見つかったが、この「古シャンシュン語」は語彙や文のサンプル数が少なく、対訳文献もないことから今のところ解読できていない。また、残念ながらこれに続くシャンシュン語文書はなく、直系の子孫もいないことから、自然言語としてのシャンシュン語はここで絶えたと考えざるを得ない。

しかし、シャンシュン語の伝統は別の形で存在していた。それはポン教を通じてである。ポン教経典の多くはシャンシュン語から訳されたと言われるように、シャンシュン語はポン教徒にとって聖なる言葉であって、そのためシャンシュン語の伝統はポン教徒によって連綿と保持され、1960 年代にはチベット語との対訳語彙集が編纂された。これは新シャンシュン語と呼ばれている。この 13 世紀には現在の四川省西部のギャロン地域で再構成されたと考え得る新シャンシュン語は古シャンシュン語の影響を受けてはいるが、言語学的解析対象としては一応別の言語として区別しておく必要がある。また、新シャンシュン語の対訳語彙集及び Haarh, Hoffmann, Namgyal Nyima, Hummel, Dan Martin らによる研究を踏まえて新シャンシュン語の性格を考慮すると、新シャンシュン語は古シャンシュン語から歴史的に変化した言語体系ではなく、古シャンシュン語の知識をもとにチベット語とサンスクリット語の要素を加えてポン教徒が作り上げた人工的言語である可能性が高い。

一般論として、古シャンシュン語解析においては語彙の比定が弱く、新シャンシュン語研究では語彙はある程度分かっても、文の構造が不明であるという難点がある。我々は今後長足の進歩を遂げつつある統計数理科学の力を借りた古シャンシュン語の文解析をさらに推進するとともに、新旧シャンシュン語の言語基層を広く考慮に入れた比較研究を開拓する必要がある。この点で、新シャンシュン語の文を含む護符の願文が存在することは解読にとって大変な朗報である。

ながの やすひこ

1946 年生まれ。東京外国語大学、東京大学大学院、カリフォルニア大学大学院を経て、1980 年国立民族学博物館任官、1995–2011 年同教授、2005–8 年人間文化研究機構理事、2011–14 年総合研究大学院大学理事。専門はチベット・ビルマ言語学。論考に、*rGyalrongic Langauges Database.*（http://htq.minpaku.ac.jp/databases/rGyalrong/）国立民族学博物館（2013）、*Bonpo Thangkas from Rebkong.*（共編）国立民族学博物館調査報告 95（2010）、*Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics.* Senri Ethnological Studies 75（2009）など。